

トピックス

学会顛末記
第 39 回大会
(熊 本 県 南 阿 蘇 村)

(学 会 前)

2000 年 に 東 京 で あ っ た ク モ 学 会 以 降 , 新 聞 社 へ 就 職 し ば ば ら く 学 会 か ら 足 が 遠 ざ か っ て い た . 入 社 5 年 目 に し て 「 ク モ 学 会 取 材 で 出 張 し て い い で す か 」 と 初 め て 上 司 相 談 . 「 ク モ で 阿 蘇 行 っ て ? 」 と て も 出 張 で 参 加 で き る 雰 囲 気 で

は ない . 何 と か 記 事 が 書 け ない か と プ ロ グ ラ ム を み て ネ タ 探 し を し た が 大 衆 紙 向 き に 書 け そ う な 講 演 が ない . そ こ で 大 学 時 代 も 何 か と 助 け て も ら っ た 新 海 明 さ ん に , 題 名 が 記 載 さ れ て い な っ た 委 員 会 の 内 容 を 取 材 す る こ と に . 「 編 集 委 員 会 と 評 議 委 員 会 は 事 務 的 で ク モ の 話 題 は ない よ 自

然 保 護 委 員 会 (吉 田 真 委 員 長) で は , 去 年 希 少 種 の 絶 滅 リ ス ク 評 価 ワ ー キ ン グ グ ル ー プ (W G) が 設 置 さ れ , イ ソ コ モ リ グ モ で の 調 査 結 果

が 発 表 さ れ る よ . ク モ 学 会 の 提 言 を 外 に 発 信 で き る か も . オ レ 仕 事 で 行 け ない け ど 行 っ て お い で よ 」 と ネ タ を も ら い , 熊 本 阿 蘇 へ 向 か っ た .

(学 会 初 日)

会 場 は 東 海 大 阿 蘇 校 舎 . J R 肥 後 大 津 駅 で 迎 え の バ ス に 乗 り 遅 れ た が , 地 元 の 中 学 の 先 生 が 「 大 学 の 裏 に 住 ん で い る つ い で に 」 と 送 っ て く れ た . 広 い 校 舎 で 迷 っ た が , 会 場 入 り 口 で は 学 生 さ ん 手 作 り の で か い キ ム ラ グ モ の 模 型 が 出 迎 え て く れ た .

私 は 午 後 5 時 か ら 自 然 保 護 委 員 会 に 参 加 し た .



2007 年 度 日 本 蜘蛛 学 会 大 会 の シ ン ボ ル
巨 大 キ ム ラ グ モ

2005 年 に 徳 本 洋 さ ん が 報 告 し た 石 川 県 で の イ ソ コ モ リ グ モ の 生 息 デ ー タ と , 鳥 取 , 島 根 , 新 潟 , 青 森 , 山 形 の 生 息 デ ー タ を も と に , 他 地 域 の 生 息 状 況 を 環 境 条 件 か ら 数 理 的 に 推 定 す る 解 析 法 を 八 幡 明 彦 さ ん が 説 明 し た . 委 員 会 で は , 各 県 へ 調 査 結 果 を 報 告 し て レ ッ ド デ ー タ ブ ッ ク づ くり な ど に

役 立 て て も ら う こ と や , 昆 虫 学 会 (9 月 17 日 神 戸 で 開 催) で の 発 表 な ど を 通 じ て ク モ を 含 め た 虫 や 工 学 , 建 築 学 な ど 各 種 学 会 と 連 動 し た 自 然



大会中のひとこま

保護活動をしようという学会方針が確認された。

午後 7 時頃、宿舎へ帰り夕食を食べた後、温泉へ。阿蘇には透明の温泉も有色の温泉もあるが、白雲山荘の湯は黄土色だった。露天風呂と内湯を両方楽しんだ後、大学時代の指導教官だった宮下 直さんと後輩の馬場友希くん、八幡さんらと飲んだ。「ちょっと一杯」のつもりだったが、気づくと熊本特産の清酒と米焼酎から、芋焼酎やビールまで瓶や缶が空いていた。

(学会 2 日目)

阿蘇の朝はすがすがしい。洗面所で歯を磨いていると、草原が広がる山がまどから見えた。ぽっかりとクモが浮かぶ青空に、山の緑がとても映えてきれいだ。ホテルにバスの迎えが来たのは朝 8 時半すぎ。2 日目は、講演から始まり、総会、ポスター発表、記念講演、シンポジウム、懇親会まで盛りだくさんだ。なのになんだか頭が重い。ああ、前日飲み過ぎなければ良かった。

講演では、ヒメグモ類に詳しい吉田 哉さんがイソコモリグモの調査結果を話していた。自然保護委員会の WG に送った山形県のデータをまとめたもので、植生、地形や海浜の状況についての具体的な説明だった。できれば、八幡さんの全国の生息域モデル推定の講演が先にあった方が、もっと分かりやすかったかもしれない。

総会後のポスター発表は、キシノウエトタテグモとキムラグモ、ハシリグモの生息状況や生活史をまとめた学生の発表 3 題とナガトナミグモの地理的変異をまとめた広島井原 庸さんの発表の計 4 題。井原さんは中国地方で採集したクモの形態の違いをまとめて種分化の歴史を探った大作。「学会でいるんな意見を聞いて刺激をうけて帰るんだよ」とさりりと話していたが、日常の仕事をこなしながら膨大なデータを収集する姿には脱帽だった。集まった人から「DNA で系統解析していけば種分化過程をもっと考察できる」などと夢が広がる話はでていたが、谷川明男さんによると、DNA 解析をするためには試薬などの消耗品に膨大な費用がかかるということだ。昨今は、研究できるかどうかの沙汰も金次第な時代になってきているのかも知れない。ちなみに井原さんは学会中に財布を会場に落としていた。

記念講演では、熊本生物研究所の入江照雄さんが登場した。入江さんは、藩校時習館の流れをくむ県立済々黌高校の元生物教諭で、洞窟の生物研究者として有名だ。30 年も前に真っ暗な洞窟内でとってきたコウモリや目の退化した生き物の貴重な写真を惜しげもなく見せてもらった。

シンポジウムでは、馬場くんの博士論文にも関わるチリイソウロウグモの形質分化の話から、学会長の鶴崎展巨さんの国際クモ学会での発表内容をふまえたザトウムシの共進化の話まで、第一線の研究者の話が続いた。

朝から夕方までの講演を終え、夕食は白雲山荘で懇親会を兼ねていた。東海大製造の芋焼酎を飲みながら、野性味あふれる赤牛のステーキがのったピラフや、熊本名産馬刺し、だご汁、そばなどに舌鼓を打ちつつ、久々に会う人々とクモ談義に花を咲かせた。

(学会最終日)

講演は午前中に終わり、ピストン輸送でキムラグモ生息地を観察した。学生さんの調査地だったので、採集はできなかったものの、丸いフタを開け、巣穴にいるキムラグモを各自カメラに納めた。観察会が終わると、バスで空港に向かったり、車で採集に向かったり、流れ解散となった。

7年ぶりの学会は、とても新鮮だった。仕事から取材で医者学会などに行くことが多いが、製薬会社や医療機器メーカーなど利害関係のある会社のサポートを受けて物々しい発表が多い。それに比べると、研究者の人もフレンドリーだし、若手も自由にものが言える雰囲気があってクモ学会は楽しい。できれば来年は「クモ」に足場をおきつつも、様々な学問や学会に糸をのばして、一般人を引きつけるような話題満載のクモ学会を取材して記事にしたい。

(朝日新聞大阪科学医療グループ・クモ担当記者 長崎緑子)



同好会情報

ここでは日本各地にあるクモ同好会で発行されている定期刊行物の内容、採集会や講演会(総会・例会)の日程などを紹介する。興味を持たれた方は入会したり、行事に参加されてはいかがでしょうか。

東京蜘蛛談話会(会長:新海栄一)

会報「KISHIDAIA」を年2回、「談話会通信」を年3回発行。採集会年4回・合宿年1回・総会例会などを年2回実施。

今年度の採集会は、神奈川県横浜市都筑区「中央公園」で実施。



東京蜘蛛談話会 2007 年度合宿参加者一同

2008年2月3日(日)

横浜市営地下鉄センター南駅改札口 午前10時30分集合。世話人 萩本房枝。公園内では談話会の会員であることを示す名札が必要です。集合時間に遅れた方は090-6319-0603(萩本)まで連絡して下さい。

例会は、2007年11月25日(日) 午前10時から 東京環境工科専門学校 〒150-0011 渋谷区東2-5-3

緊急の連絡先は、加藤輝代子 090-7012-6458
あるいは、初芝伸吾 090-6156-8378 まで
JR 渋谷駅東口(東急文化会館側)より、「学03 日赤医療センター行」バスにて5分、「國学院大学前」下車、徒歩1分、170円

KISHIDAIA 92号(2007.8.31発行)

貞元己良:島根県は我々を待っていた
西 教生:ヤマドリのそ囊から発見されたワカバグモについて

平松毅久・初芝伸吾:「Wanted!! このクモを探せ」

新海 明:クモの網から餌を盗む「生きもの」たち

西野真由子:野外における産卵後のジョロウグモ

新海 明:絡新婦はジョロウグモなのか

— 江戸時代のクモ，その新たな見方 —

新海 明：イソコモリグモ探蛛行（新潟編）

新海 明：ワスレナグモの全国分布調査結果

新海 明：ワクトツキジグモの採集記録の一覧

吉田 哉：山形県庄内砂丘のイソコモリグモ
DRAGLINES

平松毅久：埼玉県における珍しいクモの記録

平松毅久：埼玉県秩父市のワスレナグモの記録

笹岡文雄：東京・湾岸で採集されたタイリク
ユウレイグモ

< 目録ドラッグラインズ >

仲條竜太：竹富島で採集したクモ

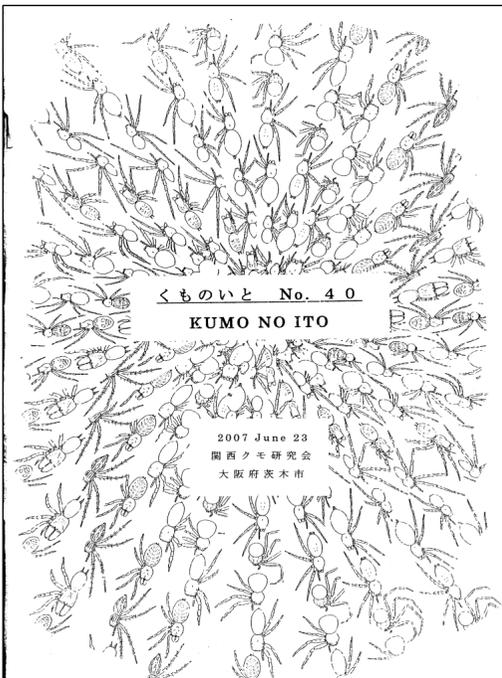
笹岡文雄：伊豆大島のトタテグモおよびその他のクモ

仲條竜太・原口岳・中西亜耶・久保真司：冬の伊豆大島から採集されたクモ

初芝伸吾：国立市のクモ類（第1報）

松田まゆみ・須藤昌子：北海道，留萌市のクモ

木村知之：東京蜘蛛談話会 2006 年度観察採集
会報告 片倉城跡公園のクモ



新海 明・谷川明男：文献による静岡県産クモ
類目録

入会申し込み

〒186-0002 国立市東 3-11-18-203

(有)エコシス 初芝伸吾 (事務局)

E-mail: hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

会費 年 3800 円 (学生 2000 円)

関西クモ研究会 (会長: 田中穂積)

会報「くものいと」を年 2 回発行・採集会・
研究会例会などを年数回実施。

例会は，2007 年 12 月 23 日 (日) に大阪市の
四天王寺高等学校で実施。

くものいと 40 号 (2007.6.23 発行)

徳本 洋：石川県で秋末・初冬に見られるクモ
のパーレーニング

田中穂積：自宅 (大阪府富田林市藤沢台) でワ
スレナグモのオス発見

田中穂積：自宅の庭でセアカゴケグモ発見

田中穂積：ツツゲハウグモの雌，滋賀県で発見

笹岡文雄：キシノウエトタテグモはどこから来
て，どこに行くのか

珍種発見記録

研究トレンド

榎元敏也：ユウレイグモの雄と雌は交配中に会
話する

清水裕行：大阪城公園でヒトエグモを採集

吉田 真：龍谷の森のワクトツキジグモ

原口 岳：利島改め伊豆大島旅行顛末記

池田勇介：大阪府のクモ

池田勇介：前記事の訂正及び僕が大阪府内で
確認したセアカゴケグモ採集記録

入会申し込み

〒567-8502 茨木市西安威 2-1-15
追手門学院大学生物学研究室内
関西クモ研究会 Tel 072-641-9550 (加村研)
Fax 072-643-9432 (大学教務課)
会費 年 1000 円

中部蜘蛛懇談会 (代表: 緒方清人)

会報「蜘蛛」を年 1 回, 「まどい」を年 3 回
発行. 採集観察会を年 2~4 回, 合宿を年 1 回,
総会・研究会を年 1 回実施.

総会・研究会は 2008 年 2 月 11 日 (月) に
東桜会館で実施の予定.

蜘蛛 (KUMO) 40 号 (2007.7.20 発行)

緒方清人: 愛知県常滑市常滑のクモ
新海 明: (続)クモの巣と網の不思議 ~ 「枯れ
枝先端」のクスマサラグモ

益田和昌: 岐阜県郡上八幡町の倍足類

益田和昌: 三重県志摩市の倍足類

大利昌久: 蜘蛛との出会い

笹岡文雄: 私とキシノウエトタテグモ

谷川明男: 大東島日記

貞元己良: アメリカのクモ採集記

滝川正子: 自然観察会から蜘蛛たちへの伝言

短報

益田和昌: 嵩山の蛇穴にコホラヒメグモは棲息
しているのか

緒方清人: アカオニグモを発見する

入会申し込みその他全般について

〒472-0022 知立市山屋敷町東山 10-6

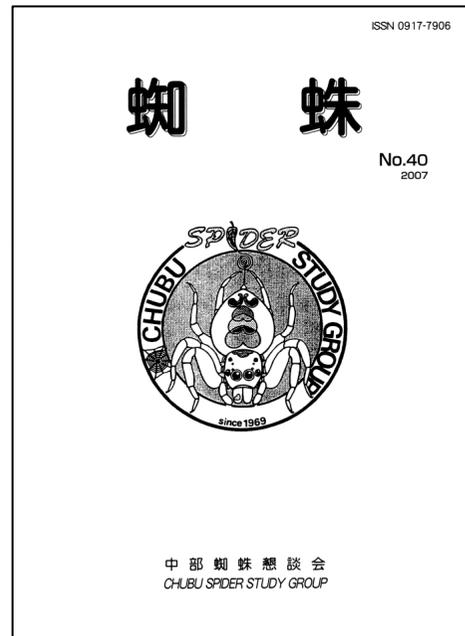
緒方清人 (代表)

Tel 0566-83-4474

E-mail: neon_kiyotoi@ybb.ne.jp

入会・会費など

〒451-0066 名古屋市西区児玉 1-8-24



柴田良成 (会計)

Tel 052-522-1920

会費

正会員 年 3000 円 (高校生以下 1000 円)

準会員 「まどい」のみ 1000 円

三重クモ談話会 (会長: 橋本理市)

会報「しのびぐも」を年 1 回発行. 採集会・
合宿・例会などを年数回実施.

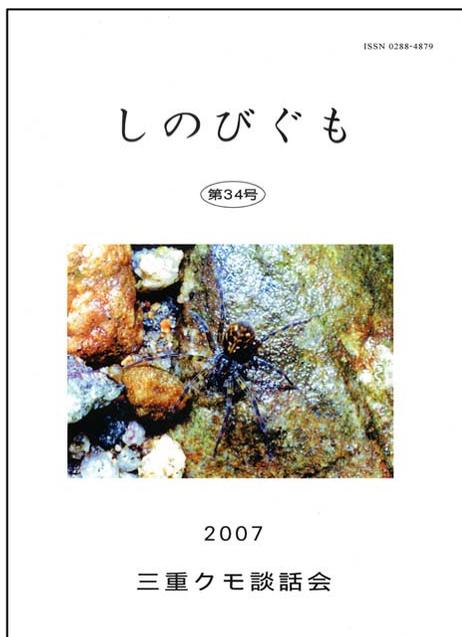
採集会は 2008 年 2 月 3 日 (日) 鳥羽市安
乗町一帯 JR 鳥羽駅 午前 10 時集合
参加希望者は 1 週間前までに事務局まで連絡を.
総会は, 2008 年 4 月に予定. 詳細は後日連
絡します.

しのびぐも 34 号 (2007.8.10 発行)

新海 明: 「ジョロウグモの網の張り替え」とそ
の思い出

太田定浩: すみかえを広げた四日市のセアカゴ
ケグモ

平松毅久: 三重クモ談話会・中部蜘蛛懇談会合



同合宿に参加して

橋本理市：ワスレナグモの旅立ち

塩崎哲哉：ちょっとした採集の記録

橋本理市：韓国の蜘蛛博物館を訪れて

前原 晋：クモとの出会い

貝發憲治：クモのバルーニングの一記録

三重クモ談話会：2006年度活動報告

入会申し込み

〒515-0087 三重県松阪市萌木町 7-4

貝發憲治 (事務局)

Tel (Fax) 0598-29-6427

会費 年 2000 円

和歌山クモの会 (会長：米田 宏)

会報「和歌山クモの会会報」を年 1 回発行。

総会・観察会を年 1 回実施。

和歌山クモの会会報 No.14(2004.9.17 発行)

以降の発行はありません。

内容は、遊絲 15 号を参照のこと。

入会申し込み

〒649-6264 和歌山市西浜 465-3 第 2 小杉
マンション 1-A 青木敏郎 (事務局)

Tel 090-1072-4414

会費 年 1000 円

関西クモゼミ

2007 年 12 月 16 日 (日) に開催の予定。

連絡先 吉田 真

東京クモゼミ

毎月 1 回, 第 1 日曜日に千葉縣市川市の加藤宅
で開催。会費などなく誰でも参加できる。

連絡先 新海 明 0426-79-3728 または, 加
藤輝代子 047-373-3344

言いたい! 聞きたい!



ザトウムシどんだけ~!

—第 17 回国際クモ学会議
ブラジル大会印象記—

鶴崎展巨 (鳥取大・地域・生物)

就寝中に私が見る夢はいつもモノクロである
が, 大学生の頃に一度だけ色つきの夢を見たこ
とがある。それは, 南米に出かけて, とある所
で, アカザトウムシ亜目の新熱帯固有の 1 科で
ある Gonyleptidae のザトウムシをつかまえた
という夢だったが, モノクロの背景の中で, そ
のザトウムシのみが鮮やかな赤と黄色に彩られ
ていた。このカラフルかつ特異な体形が魅力的
な大型のザトウムシを私は大学に入ってから
の頃に買った Levi 博士ら(1968)の「Spiders and
Their Kin」(本書はたぶん私が初めて買った洋

書だが、表紙にも、クモと並んで、どぎつい色をしたこの仲間のザトウムシの絵が出ていた)で知っただが、心のどこかで惹かれていたのだろう。ブラジルに行けばこの仲間の生きたものを見られる!(かもしれない)。また、ブラジルは現在ザトウムシ研究が世界で最も活況をおびている国である。何回かの国際学会参加のうちに仲良くなったこの国をはじめとする南米諸国の陽気でフレンドリーなザトウムシ研究者たちと思う存分ザトウムシ談義ができそうだ。さらに、それほど旅行好きでもない私だが、この国際クモ学会議に何度か参加しているうちに、南米を除く4つの大陸のそれぞれ少なくとも1カ国には旅行したことに、いつのまにかなっていた。この大会に出席すれば、五大陸制覇である。これでは、何があるかとブラジル大会には行かざるをえない。以下は、こうして参加することになった私の、1 ザトウムシ研究者としての関心から眺めた本大会の印象記である。

台風5号接近で前日の鳥取空港からの東京便は欠航となり、気をもんだが、無事、8月4日に鳥取を出発し、同日に成田、アトランタと乗り継いで5日早朝にサンパウロに到着した。長い道中だったが、今大会で話すことになっていた一般講演1つとシンポ講演1つの草稿の手直しでけっこう忙しかった。出発直前にかろうじてできあがったそれらの草稿は、読み上げるとどちらも時間が数分超過することがわかったので、話をスリムにする必要があったのである。前の座席の背もたれの液晶画面で見られる映画の中に「スパイダーマン3」があったので、これも見なくてはならなかった(TVで見た前2作はどちらもそんなに面白いとは思わなかったのだが、なにしろ、これからクモ学会に出かけるのだから)。

サンパウロ空港で日本からの参加者3人(小

野展嗣さん、宮下直さん、谷川明男さん)を含むブラジル国外からの大会参加者に合流。旧知のザトウムシ研究者 Pedro Gnaspini さんが会場のあるサンペドロという町への貸し切りバスの手配をしていたが、バスがなかなか来ず、さらに途中に寄ったドライブインで当初の予定にはなかったらしい昼食をなりゆきまかせてとったため、会場の Hotel Fazenda Colina Verde というこぎれいなリゾートホテルに着いたのは午後の2時くらいだった。ホテルの部屋に荷物を置き、自ら受付をやっていた今回の大会長である Ricardo Pinto-da-Rocha さんに挨拶。彼は今年の2月に出たザトウムシの生物学に関する単行本(Pinto-da-Rocha et al., 2007)の編者代表も務めたザトウムシの超やり手の分類研究者である。夕方からのオープニングセレモニーでも旧知の何人かの知り合いと再会を喜んだが、大会プログラムを見ると(いつも不便に感じるが、この会議では大会会場に来るまでプログラムがわからない)、翌日の大会初日に自分の口頭発表が入っていたので、まだ完全にはできあがっていない PowerPoint ファイルをいじるべくあまり遅くならないうちに部屋にもどった。大会直前に本部から届いた「寒いからセーターやウィンドブレーカーを持ってきたほうがいい」という注意喚起メールを見て、薄手のセーターをもってきたが、この夜は確かに部屋が寒く、それが役だった(でもこの夜だけだった)。

大会は、翌日6日8時30分から Adriano Kury さんによる茶目っ気たっぷりの Discovering the arachnids in South America と題するプレナリーレクチャー(参加者全員が聞けるように組まれた総会講演)で開幕した。彼はものすごい勢いで revision を書くアカザトウムシ亜目ザトウムシ分類の牽引者であるが、その性格の陽気さで右にでる者はいな

い。前日は、腕に入れた日本アニメ「吸血姫美夕（注：「バンパイアみゆ」と読む）」のタトゥーを自慢げに見せてくれた。が、漫画世代ではあるが、アニメ世代といえるほど若くない私はうかつにもこのアニメを知らず（帰国してから何人かに聞いたら、知っている学生はいた）、彼をがっかりさせてしまった。ちなみにブラジル（とくにサンパウロ）でのアニメブームはすごく、日本のアニメ作品はほとんど手に入るとのことだった。

このあと10日の最終日までの5日間、毎日、8時半から10時まで Plenary lecture、そのあと休憩をはさんで2会場を使って10時30分からの2時間にシンポジウム（合計7つ）、午後は14時から17時15分まで一般講演、そのあと19時15分までポスター発表、というスケジュールでプログラムが組まれていた（最終日の5日目だけはシンポがなく、午前中に一般講演、12時から閉会式）。このスケジュールはきつ過ぎず、ゆる過ぎずで、また、似た内容のシンポや一般講演が別会場で同時時間帯に重なってしまうということもほとんどなく、なかなかよくできていた。2日目以降の Plenary は順に、Todd Blackledge、Jeffrey Shultz、David Zeh、Jason Dunlop の各氏の話で、どれも面白く聞き応えのある内容だった。

私の一般講演での発表は初日の午後に組まれていた。日本語版の PowerPoint には Mac 版では PowerPoint2004 から、Windows 版では PowerPoint2007 から発表者用ツールというものが装備されている。このツールを使うとパソコン画面上ではスライド映像に加えてその説明文を書けるテキスト画面やスライドショーをスタートしてからの経過時間などが同時に表示されるが、液晶プロジェクターにはスライド映像のみが送られるので、画面上で原稿を見ながら

PowerPoint を操作できる。残念ながら制限時間のある学会発表（今回、一般講演は12分）をその場でまるごと文章をつくりながらしゃべれるほどの英語力は私にはなく、往路の機中でいじった原稿を覚える時間もなかったのも、このツールが頼みの綱だった。会場で使用されている Windows ノートパソコンの PowerPoint のバージョンは2002で、このツールが使えないことはわかっていたので、持参した私の Mac のノートパソコン（1世代前の PowerBook G4）を使わせてもらう魂胆だったが、会場に行ってみると発表者の前の演台が狭く、Windows パソコンを片づけないと私のパソコンを置けないことがわかった。それでつい遠慮して自分の Mac でやるのをあきらめ、しかたなく紙原稿（機中でだいぶ修正のペンを入れたのでかなり読みづらくなっている）を見ながらしゃべった。その後見ていると、おそらく Mac であろうが自分のノートパソコンにつなぎかえて発表をしている人がけっこういることがわかった。それで3日目の午前にあった「生物地理学研究のモデルとしてのザトウムシ」と題されたシンポの中での発表のほうは、Mac につなぎかえさせてもらって、発表者用ツールを活用した。おかげで今度はあわてず、与えられた20分ほぼちょうどで話ができ、発表は原稿を見ないでやるべきである。でも、英語での口頭発表には気後れがあったり、今回の私のように時間がなくて準備不足のまま会場に来てしまったり（若い学生のみなさんは決してまねしないように）、といった場合にはこの発表者用ツールは心強い味方になる、ということを実感した。

今回の大会で非常に印象深かったのは、ザトウムシに関する講演の多さである。ブラジルは現在、ザトウムシ研究が最も盛んといってもいい国である。既述の Pinto-da-Rocha と Kury

という2人の分類研究者に加えて、生理生態が得意な Gnaspini, それに行動生態学をリードする Glauco Machado と、私よりもずっと若くて元気な中堅研究者が4人もいるのだが、彼らがそれぞれの大学で指導している多数の院生・学生がこぞって口頭発表やポスターを出していた。その結果、今大会の口頭発表115題(一部講演取消があったので、実際の数はこちらをわずかに下回っていると思われる)のうち14題が、ポスターでは259題のうち28題までがザトウムシを扱ったものだった。どちらも全体の10%をわずかに超えていどでしかないとはいえ、これまでの大会と比べると「どんだけ〜」とおもわず口走ってしまうほどの大幅増である(ちなみに、私が初めて出席した1992年のブリスベン大会ではザトウムシの発表は私と今は亡き Hunt さんの2題しかなかった)。あまりに多すぎて、ポスターはぜんぶを見きれず、かろうじて全部を聞いた口頭発表も、初めて見た院生の人たちは名前を覚えきれないほどだった。また、生態や行動関係でもブラジルの元気さ

が印象に残った。広島修道大学の中野進さんが以前に長期滞在したカンピナス大学(サンパウロの100kmほど北のカンピナスという都市にある)にはクモの行動や習性で面白い仕事をして Ecology 誌や Biotropica 誌などに論文をバリバリと出している人たちがいるという話を中野さんから事前に聞いていた。プログラムにはくだんの研究者である João Vasconcelos-Neto 先生や Gustavo Romero さんの名前があったので楽しみにしていたが、彼らの研究室から出ているポスターや口頭発表はたしかにどれも面白かった。Romero さんの最大の関心は、捕食者であるクモが植物上にいることで生じるさまざまな間接効果の検出にあるようで、彼の研究室の院生たちがそのテーマでのポスターや口頭発表を4題ほど出していた。ササゲモ科の1種 *Peuceetia flava* は生息場所として、茎に粘液分泌用の毛状突起をもつノボタン科の植物 *Phyncanthera dichotoma* を特異的に選好しており、季節によっては、このクモがとまっている株は植食者からの被食が著しく減るとい



写真1. ランチ風景。大会3日目、ザトウムシシンポのあとにザトウムシ研究者で集まったテーブル。左側一番手前でこちらを向いているのはシンポを企画したキューバ出身の Abel Gonzalez, そのうしろが Glauco Machado。多すぎて、最後まで名前がわからなかった人多数。

別会場でのザトウムシ関係の一連の発表と重なっていたため残念ながら私は聞き逃したが、この話題に関する彼らの口頭発表は最終日の閉会式での表彰で学生の最優秀プレゼンテーション賞を獲得していた。ちなみにこの大会に出版を合わせたのだろうか、出たばかりらしい、ブラジルをはじめとする南米諸国の研究者によって執筆された「クモの生態と行動」と題するポルトガル語の本 (Gonzaga et. al. 2007) が会場で販売されていた。残念ながら私はポルトガル語が読めないが、見るからに面白そうでブラジルでのクモ研究のレベルの高さと活況がうかがわれる好著のようだった。

Plenary のみならず、シンポジウム講演や一般講演にも面白い話はたくさんあった。私が聞いた範囲で個人的に最も感銘を受けたのは、3日目の午後にあったチェコの Rezác さんによるイノシグモ科での外傷性受精の報告だった。外傷性受精というのは精子が雌の交尾口からではなく雄が交尾器を雌の体表に直接突き刺すことによって生じた傷口から移送される交尾方法を指し、これまで節足動物ではハナカメムシ科やトコジラミ科などの半翅目とネジレバネ目では知られていなかった。Rezác さんはイノシグモ科の未記載の小型種では雄が触肢の栓子の先端を雌の腹部下面に突き刺し、精子の移送がそこからおこることをつきとめ、その行動を動画で見せてくれた。この発表は多くの聴衆にインパクトがあったようで、最優秀プレゼンテーション賞を獲得した。

2日目午前中の「小群のクモ形類における社会行動」と題するシンポの中での Machado さん (現在はサンパウロ大学だが、彼も少し前までカンピナス大学にいた!) によるザトウムシの保父行動の話と、3日目午後の上記の Rezác さんのすぐあとにあった Bruno Buzatto さん

(Machodo さんの院生らしい)によるザトウムシの雄の2型の話も私には非常に興味深かった。無脊椎動物には珍しくザトウムシでは雄親による卵の保護がアカザトウムシ亜目の6科でそれぞれ独立に進化しているが(これほど保父行動が頻繁に進化している動物群は他の無脊椎動物にはない)、Machado さんはブラジル産のザトウムシを使って、これが性選択の産物であることを示した。つまり、卵を守っている雄は雌にもてることで交尾機会が増加し繁殖成功が高まるためにこの行動が維持されているのであって、従来コオイムシなどで重要と言われていたパターンニティの確実さにはこだわっていない;つまり、守っている卵が必ずしも自分の精子で受精されてなくともよい、ということだった。いっぽう Buzatto さんの話は Gonyleptidae の *Acutisoma proximum* という種にみられる雄の2型が、繁殖戦略の違いと結びついているというものだった。日本産のニホンアカザトウムシでもこの現象は鋏角のサイズに関して見られ、私の研究室でもだいぶ以前、鋏角の大きい雄がなわばり、小さい雄はスニーカー的な行動をとると推測し、野外と室内実験でデータを集めたことがあったが、この仮説を実証するにいたらなかった。先を越されて残念だが、林床の石下や落ち葉下に潜んでいて行動観察が困難なニホンアカザトウムシではこの解明には一条の光明も見えていなかったのも、やむをえない。南米の Gonyleptidae はアカザトウムシ亜目だが概して大型で歩脚が長く樹幹や葉の上に出ているので行動観察にも向いているようである。

大会中はずっと天気がよかった。いちおう冬らしいが、日中は日差しがやや暑く感じられるくらいほどで快適だった。敷地内にはマメ科とツツジ科の中間みたいな印象の目立つ花をつける科のわからない樹木やブーゲンビリアもたく

さん咲いていた。朝や昼の休憩時間にホテル敷地の裏山の上まで往復してみたが、林床は概して乾燥しており、ザトウムシどころか、クモの網も昆虫もほとんど見られなかった。ザトウムシはもっと山奥に行かないといないのだろうと思ひこんだ矢先の4日目の朝、ザトウムシを中心にクモ形類を多く撮っている写真家の Joseph Warfel さんが、裏山で地表の石をめぐってみつけたという Gonyleptidae のザトウムシを見せてくれた。自分で見つけていないのでいささか感動に欠けるが、生きた Gonyleptidae を見るという夢はとりあえずかなえられたわけである。前回ベルギー大会でも会った日系三世の若手ザトウムシ分類研究者である Marcos Hara さんからサンパウロの夏は蒸し暑くて大変だと聞かされたが、帰路のアトランタまでのフライトで偶然となり座った、サンパウロ大学での1年間の語学留学を終えてこれから日本に帰るところという東京外語大の学生さんの話では、日本の夏とくらべればずっと過ごしやすいとのことだった。

この大会では長年にわたる南北アメリカのクモ分類学への貢献をたたえ Herbert Levi 博士に特別賞が贈られることになっていて、最終日には閉会式に先だって直弟子の一人である Wayne Maddison さん(ハエトリグモ科の系統解析と種分化が専門で、かつ系統解析ソフトの MacClade の作成者としても著名)から Levi 博士の経歴と功績の紹介があった。その PowerPoint のスライドに、冒頭にあげた Gonyleptidae のザトウムシ絵つきの「Spider and Their Kin」の表紙が出てきてなつかしかった。Maddison さんも子供の頃、この本を手にしてクモ好きになったのだそう。

最終日は、偶然同じ航空会社のチケットをとっていた谷川・宮下の両氏とともに午後3時出

発のバスでサンパウロに向かったが、ひどい渋滞でサンパウロ空港に着いたのは午後8時頃だった。デルタ航空アトランタ行き10時55分の便に乗らねばならないのに、デルタ航空のカウンターと、出発ロビーへの入口の両方にはすごい人数の行列ができており、出発時刻に間に合うのかとあせったが、私一人はかろうじておみやげを探すくらいの時間を残して搭乗口についた(宮下さんたちはチケットがダブルブッキングという不運にみまわれ、出発間際まで待たされてしまったようだ)。赤道がとおっているような南国の空港でおみやげに買ったコーヒーやおかしはあまりうまくいった試しがないので、警戒して最小限しか買わなかったのだが、帰国して試してみると、コーヒーも「Yoki = 与喜」という名前のメーカーのソフトクッキーもたいへん美味で、もっとたくさん買わなかったことを後悔した。

最後になったが、会期中最後の夕食となった4日目の夜のバーベキューパーティの会場で、参加者に配られた記念品を写真2に示す。ビスケット生地のような質感の粘土でつくってあるらしい置物で、タランチュラらしい黒いクモの前にいるのが Gonyleptidae である。触肢が長すぎてまるで歩脚が5対もあるように見えるのと、腰がくびれすぎているのが難だが、それで



写真2. 参加者に配られた大会記念品。

も左右にはりだした第4脚腿節によって、このモデルが本科のザトウムシだということはわかる。Gonyleptidaeに会いたいという動機はここでも満足させられたわけだ。往復の長時間のフライトはいささか辛かったが、私にとってはこれ以上望むべくもないといえるほど充実した大会だった。

文献

- Gonzaga, M. O., Santos, A. J., & Japyassú, H. F. (ed.) 2007. *Ecologia e Comportamento de Aranhas*. Editora Interoiência, Rio de Janeiro, 480 pp.
- Levi, H. W., Levi, L. R., Zim, H. S. & Strelakovsky, N. 1968. *A Guide to Spiders and Their Kin*. Golden Press, New York, 160 pp.
- Pinto-da-Rocha, R., Machodo, G., & Giribet, G. (ed.) 2007. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 597 pp.

Proliferation of harvestman research – A report of the 17th International Congress of Arachnology, 5-10 August 2005, São Pedro, São Paulo, Brazil. by Nobuo Tsurusaki



日本産コガネグモ科ジョロウグモ科アシナガグモ科のクモ類同定の手引き

谷川明男 著

日本蜘蛛学会 発行

ISBN 978-4-9901449-9-9

谷川明男さんはこれまでゴミグモ属やヒメオニグモ属の再検討をはじめ新種記載などコガネグモ科やアシナガグモ科に関する数多くの論文を出している。Acta Arachnologicaには谷川さんの論文が掲載されないときはないといってもよい。また、沖縄とくに西表島へ年に数回訪れ、多くの種について研究し「沖縄クモ類図鑑」として2003年に出版した。ヒメグモ科についても多数の標本を採集し、私の研究にも多大の貢献をされている。西表島産のヤエヤマヒシガタグモ *Moneta tanikawai* やタニカワヤリグモ *Rhomphaea tanikawai* は、谷川さんにちなむ名前として種小名や和名をつけた。

谷川さんは2002年5月「日本産コガネグモ科の分類学的研究」により、博士(理学)の学位を京都大学から受けられた。そのときの学位論文の一部をなすものがコガネグモ科の総説で、それにジョロウグモ科とアシナガグモ科を加え、今回の出版となった。ジョロウグモ科は最近独立して使われるようになったとのことである。私も同じときに学位を受けたが、そのときは何とか遅れをとらぬようにと「日本産ヒメグモ科の分類学的研究」をまとめあげた。しかし、谷川さんはその後研究中心の生活にはいり、今では私には手の届かないところまで研究が進んでいる。

かつて、コガネグモ科は故八木沼健夫先生、アシナガグモ科は故大熊千代子先生が研究されてきた。それらを発展し、谷川さんの専門分野とした。これまでは八木沼先生の図鑑により概要をつかんできた。しかし、近年谷川さんによる分類の研究がすすみ、これらの科すべての属・種に関して知ることは困難になった。その点で本書が発行された意義はとても大きい。もともとは2002年出版を旨ざしていた「日本産クモ類図鑑」の一部をなす計画であった。谷川

さんの原稿は完成していたが、残念ながら図鑑は出版までこぎつけていない。図鑑の完成が大幅に遅れたことにより、学位論文の公表時期という点で、自費出版という形をとらざるをえなくなった。

私が出版した「日本産ヒメグモ科総説」は、属や種の検索表を付し、記載をおこない、所検標本や引用文献などを可能な限り取り上げた。それは、記載をすると同時に、分布をはっきりさせ、文献の再引用を容易にするためと考えたからである。基本的には日本語による記載をおこなったわけである。私は分類の研究にも使えるように考えたが、谷川さんの本書に対する考えは一般の人が使えるようにということを目ざしたものと考えられる。

本書の特徴は標題にもあるとおり、「同定の手引き」を主眼に置いたものとなっている。日本にはコガネグモ科 31 属 122 種、ジョロウグモ科 1 属 2 種、アシナガグモ科 11 属 44 種が産するとのことである。これらの種すべてについてまとめたということはすごいことである。まず目につくのは本書の最初にある 414 枚のカラー写真である。これはすべて谷川さんが撮影したものであり、5 種を除きすべての種を表している。わずかに標本の写真があるものの、ほとんどは生きていたときのものである。同定するときまず何を見るかという外観であり色彩である。その点でこれらの写真は非常に役立つものとなる。本文は属や種の特徴をあらわす簡潔な説明で、外雌器と触肢が図示されている。近似種との比較が容易に可能で、種の同定にはほぼ対応できるといえよう。

取り上げられているクモは大形の種が多く、目につきやすくなじみが深いものも多い。そのため同定にも取りつきやすい。属などのグループがわかれば、カラー写真だけでも種の見当が

つき、本文と生殖器の図で確認するということになるだろう。その点で気軽につかうことができると思う。クモ学会の会員などクモに興味のある人であれば問題は無い使いこなせると思う。分類の研究に使うとなればこの本以上の文献が必要となるが、そのような人はごくわずかと考えられる。一般の研究者は、これだけあれば日本産のコガネグモ科、ジョロウグモ科、アシナガグモ科のクモが調べられることになる。

クモ学会会員はもちろん、クモ類に興味のある方は手元に置かれることをお勧めする。今後の調査・研究にとても役立つものになることは間違いないと思われる。

(吉田 哉)



「続・暗闇に生きる動物たち」

(入江照雄著)

入江照雄さんの古希を記念した出版物が刊行されました。おもな内容を以下に紹介します。入手を希望される方は、下記までご連絡下さい。

・洞窟と動物

・クモ類

熊本にすむ四肺類・熊本のキムラグモ類、熊本にすむ野外、屋内のクモ・九州の長肢系ホラヒメグモ、九州のマシラグモ類とヨコフマシラグモの再記載、九州のナミハグモ類と 2 新種の記載、熊本県産クモ類目録、日本のユウレイグモ図説

続・暗闇に生きる動物たち



2007

入江照雄

- ・ サソリモドキ
- ・ 熊本の湧水と淡水の小動物
- ・ ナス科植物
- ・ 諸々の記録

購入希望者は、(郵便振替)口座番号 0175
0-7-82683 加入者名 入江照雄(加入者負
担の票を使用)

連絡先 Tel・Fax 096-324-4317

申し込み締切 12月30日

定価 8,000円(会員特別価格 5,000円)送
料,郵便振込み料を含む.426ページ,カラ
ー写真約520枚.

(新海 明)

採集情報

日本各地で採集された,稀産種や分布上の重
要種などについての情報を掲載する.これを読
み,「私もこんな種類を採集しているぞ」とい
う方はその情報を是非お寄せいただきたい.

ワクドツキジグモ

神奈川県厚木市中荻野 荻野運動公園 2007
年6月8日 1 (成幼不明) 石井英介発見
谷川明男同定確認(写真にて)[神奈川県新,分
布東限更新]

ツシマトリノフンダマシ

神奈川県座間市入谷 県立座間谷戸山公園内
2007年6月2日 1 (成幼不明) 大塚裕美
発見 谷川明男同定確認(写真にて)

ヒゲナガハシリグモ

鹿児島県始良郡加治木町井出向/網掛川河岸
2007年6月16日 1ex(詳細不明) 加藤充
宏採集 谷川明男同定確認(写真にて)[鹿児
島本土新]

ハラナガヒシガタグモ

鹿児島県始良郡加治木町井出向/網掛川河岸
2007年6月16日 1ex(詳細不明) 加藤充



神奈川県で発見されたワクドツキジグモ
石井英介氏撮影



ハラナガヒシガタグモ

宏採集 谷川明男同定確認(写真にて)[鹿児島県本土新]

ムツトゲイセキグモ

福島県 福島空港公園 2007年7月8日 1
佐川弘之発見 谷川明男同定確認(写真にて)[福島県新]

キクメハシリグモ

福岡市西区桑原九州大学伊都キャンパス生物多様性保全ゾーン 2007年6月30日 1ex(詳細不明) 江島義文発見 谷川明男同定確認(写真にて)[福岡県新]

ワスレナグモ

栃木県小山市渡良瀬遊水池 2007年8月12日 幼体1 安藤昭久採集同定 [栃木県新]

香川県丸亀市丸亀城跡 2007年10月23日 幼体1, 住居2 谷川明男・新海 明採集同定 [香川県新]

リュウキュウコモリグモ

沖縄県八重山郡竹富町西表島 2006年5月25日 1 谷川明男採集同定 [西表島新]

コトラフカニグモ

沖縄県八重山郡与那国町与那国町 2007年6月3日 1 谷川明男採集同定 [与那国島新]

ハラピロスズミグモ

沖縄県八重山郡与那国町与那国島 2007年7月4日 幼体1 谷川明男採集同定 [与那国島新]

フタオイソウロウグモ

鹿児島県熊毛郡種子島奥 2007年7月5日 1 谷川明男採集同定 [種子島新]

チビコモリグモ

鹿児島県熊毛郡種子島南種子町 2007年7月4日 1 谷川明男採集同定 [種子島新]

マルゴミグモ

東京都杉並区浜田山柏の宮公園 2007年9月4日 高木 B.俊採集 谷川明男同定 [東京都本土新]

(新海 明・谷川明男集約)



ギャラリー



『アシダカが水に潜る!』

西表島在住の高市さんからメールが来た。ホソミアシダカグモが水に潜るところを観察されたということだった。私は、西表に24年間も通っているが、ホソミアシダカが水に潜るところは見たことがなかった。たしかにホソミアシ

ダカは沢でよく見るが、まさかアシダカグモ類が水に潜るとは思ってもいなかった。今度出かけたときにはぜひ見てみたいものだ。

(高市澄人氏撮影・谷川明男コメント)

遊絲 19, 20号会計報告(2006.9~2007.8)

収入	
寄付	77,328 円
学会補助	5,200 円
繰越金	27,172 円
合計	109,700 円
支出	
遊絲 19号送料	19,920 円
遊絲 20号送料	20,160 円
紙/封筒/プリンター用紙	39,511 円
小計	79,591 円
次号繰越金	30,109 円
合計	109,700 円

編集後記

今年は、九州と四国へキムラグモ類やトタテグモ類を調べに、新潟と下北半島へはイソコモリグモの分布調査に行ってきた。ここで見たクモの記録を残そうと思っているのだが、これがなかなか難しい。きちんと記録をとっていなかったことによるものだ。調査対象となったクモの記録は無論きちんとしているのだが、その他のクモがおろそかになってしまうことが多かった。少しずつ記憶を呼び起こしながら、遊絲にも報告したいと考えている。

今年の大会で、遊絲への補助金が増額されることが決まった。今までは10円×会員数×2回分の補助があったが、とても出版費用を賄うことはできなかった。出版から10年

が経過して、やっと寄付金集めの苦勞から解放されそうである。いままでに賜った多くの会員のご厚情に感謝申し上げますと同時に、これからもご協力を宜しくお願いしたい。

(新海 明)

遊絲原稿送付先

〒192-0352 八王子市大塚 274-29-603

新海 明まで

E-mail では dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp (谷川明男) まで

発行は、年2回(5月、11月)の予定。締切は発行月の前月末日です。

日本蜘蛛学会

入退会は

庶務幹事

〒520-0062 大津市大谷町6 D-6

榎元敏也

E-mail: tm@sume@pop21.odn.ne.jp

会費の問い合わせ及び住所変更は

会計幹事

〒186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203

(有)エコシス 初芝伸吾

E-mail: hatsushiba-e@days@n8.dion.ne.jp

Tel 042-501-2651

年会費 正会員 7000 円(学生は 5000 円)

郵便振替口座 00970-3-46745

遊絲 第 21 号

2007 年 11 月 25 日発行

編集者 新海 明, 谷川明男, 池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 鶴崎展巨